

断章 旭川のアイヌ語 地名研究

②6

高橋 基

これから名寄を経由してオホーツク海岸へ出るルート、また、上川から空知川上流を経由して十勝に出、太平洋に達するルートが、松浦武四郎の構想であった。安政五年の十勝越えは、そのための調査であった。

武四郎の道路開削構想の最も代表

写真②

「札幌越大新道申上書」の中で、右の安政五年の「コタン廻り」が活用されている。前回の大番屋からの「チクハツフト支流の図」を参照していただければ幸いである。

チクハツフト大番屋から、(写真②)「扱此処にてチクハツ川を越へ、

(アイヌ語地名研究会幹事) ※毎月第一週号に掲載します

— ポンメムのメモ (下) —

的なものが、「札幌越大新道申上書」である。長万部、虻田から羊蹄山麓を通り、現在の中山峠を越えて札幌に出、さらに石狩川を遡り、旭川に達し、これから名寄を経由して北海岸のホロナイ(現在の雄武町幌内)に達する道路を幹線とし、さらにこの幹線から、十勝・釧路・斜里・根室・留萌・増毛・門別・勇払などへ通ずる道路を開削することを提案している。

七八丁にてメモ村、また七七八丁も上の候でウシ、ハツ、また七八丁にてヲチンカハ、アサカラ、二十余丁上りウエンハツ、三十丁も上りヒ、等」のコタンが続き、「惣て此辺平地に御座候。漁猟畑作十分見込有之申候」と記述している。また、前回二つの絵図で見た武四郎が実際に歩いたルートについては、アイヌの人たちの「往来道有之候間、是より三里斗り川上ヒ、迄の処は別段新道は切開候には不三及申候。」と、石狩川左岸のメモから現在の永山・当麻・比布までの三里の間は、アイヌ

前回は、松浦武四郎の安政五年(一八五八年)の十勝越えの行程の中で、旭川での「当所コタン廻り」の武四郎自筆の図で、ポンメムのメモは石狩川の左岸にあったことを確認した。

写真①は、武四郎がその時に持参した野帳(フィールドノート)の『午第一番』で、「コタン廻り」の最初と最後の部分である。先ず忠別川川口の三家を訪ね、ここから、「メモへ舟に(一)脱落」行(上段)、以下、アサカラまで行き、引き返して忠別

写真①

さて、松浦武四郎は、箱館奉行所の蝦夷地御用雇として在職中の蝦夷地経営に関する建言・報告書を、安政六年(一八五九年)に「熾心餘赤」として

編集した。その中で、武四郎が最も重視したのが、幹線道路の開削であった。石狩川を遡り上川に達し、そ

川を渡り、ベベツ(美瑛川)のクーチンコロの家から、「右之通歩帰る」(下段)と記録している。「戊午日誌」と異なり、実際の巡回日は、三月三日(陽曆四月十六日)で、一泊せずにアサカラから引き返していることが分かる。